

ダンジョンに
出会い、求めるのは
間違ってる
だろ
うか

大森藤ノ
OMORI FUJINO
イラスト ヤスダスズヒト
YASUDA SUZUHITO

BOOK☆WALKER限定 購入特典

大森藤ノ 書き下ろしショートストーリー

『決戦前風』

GA文庫

© 大森藤ノ/SBクリエイティブ イラスト：ヤスダスズヒト

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか18

書き下ろしショートストーリー

大森藤ノ



本書に掲載されているコンテンツの著作権等の知的財産権およびその他すべての権利は、S Bクリエイティブ株式会社または正当な権利を有する第三者に帰属します。

本書の内容を権利者の許諾なく複製・複写・翻案・放送・出版・データ配信（送信可能化を含む）などすることはできません。

4 『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか18』書き下ろしショートストーリー

決戦前風^{ぜんか}

——見えた。

視界の奥、遙か彼方、常人では決して視認できない距離でなお、その空色の瞳は『迷宮都市』の姿を捉えた。

二度の『昇華』を経て、身体能力及び五感の機能まで格段に上昇したリューは、懐から羽根を模した魔道具を取り出し、羽柄付近に取り付けられている青の宝玉を、砕いた。

双子水晶を素材にした宝玉が共鳴の魔力を放つ。

これで遠く離れたもう片方の魔道具——作成者本人に報せるだろう。

【疾風】がオラリオに迫っている『合図』を。

「リユー、アスファイに連絡を？」

「はい！ 事前の打ち合わせ通り、番の羽根を砕きました！ 『合図』を受け取ったアンドロメダが迎えにくる筈です！」

すぐ後ろで、妖精の細長い耳朵を撫でる女神の声。

背中に密着している正義の女神、アストレアに、リユーは激しい馬蹄の音にかき消されないよう声を張った。

眷族と神が会話を交わす場所は、『揺れる馬上』。

前方で手綱を握るリユーはアストレアとともに、凄まじい速度で駆け抜ける駿馬に騎乗していた。それもただの馬ではない。

神秘の化身とも呼ばれる『精霊』が姿を変えた、『精霊馬』だ。

新生【アストレア・ファミリア】が拠点を据えていた剣製都市から、オラリオが存在する大陸最西端までの道程を、通常の馬々とは比較にならない精霊馬の豪脚によつて、まさに疾風迅雷のごとく駆け抜けていた。

「新たな『武器』に加え、『精霊』の準備まで！ 先を見抜くご慧眼、本当に恐れ入ります！」

「たまたまよ。貴方の武器を生むため、精霊の協力が必要だっただけだから」

五年前、オラリオを発ったアストレアが準備していたことは二つある。

一つ目はリユーの新たな武装、《アルヴス・ユースティティア》の作成。

復讐の炎に身を焼かれたリユーが再び自分のもとに現れる時、それは旅を終えて己の『正義』の答えを見つけた時だとアストレアは確信していた。長い旅路を終え、真に目覚めた妖精には新たな力と星明りがきつと必要になるだろうと、女神はそのためにも剣製都市に移り住み、彼の都出身の鍛冶師に協力を願い、眷族に迎え入れていたのである。

そして二つ目が、『精霊』との交渉。

《アルヴス・ユースティティア》の作成のために『神の分身』とも呼ばれる精霊を見つけ出し、協力

を取り付けていたのだ。図らずも戦争遊戯への急行のため、こうして武器化ならぬ『獣化』までして、風の精霊は尽力してくれていた。

「はあ、ひい、待ってつ、団長^{セシル}うゝゝゝ!! もうバテそう……! オエッ……!」
「待たない! 戦争遊戯^{ウォーゲーム}はもう始まつてる! このままじゃありゅう先輩の到着が間に合わないんだから!」

「わかつてるけどつ、剣製都市からずつと走りつ放しだし……! オエッ!!」

「アストレア様の眷族がオエッオエッ言うなあー!!」

かまびすしい後方をちらりと一瞥すれば、精霊馬の後に続く眷族達——新生【アストレア・ファミリア】がギャーギャーと騒いでいた。

眷族は全員女性である中、まだ何とか食らいついている団長の少女が必死に怒鳴り散らしては、ヒューマンや獣人の団員達がヒイヒイ言いながら追いかけてきていた。

彼女達はみな、主神であるアストレアの護衛のため、そしてまだ会って間もない先達^{リユール}のために同伴してくれている。

正直に語ってしまえば、Lv・6となつたリユール一人で駆け抜けた方が、迅速に迷宮都市に辿り着くことはできただろう。それこそ『精霊馬』よりも遥かに早く。

だが、戦争遊戯^{ウォーゲーム}の戦闘形式が『神探^{ハイド・アンド・シーク}し』——主神と眷族の同時参加型の試合——である以上、リユール単独で参加を果たしたとしても、主神不在では必ず揉める。

【ヘルメス・ファミリア】から戦争遊戯^{ウォーゲーム}の詳細が綴^{つづ}られた文^{ふみ}が剣製都市に届いた時、アストレアにそう指摘され、リユールはこの『強行軍』を選択した。

アストレアとともに戦場へ向かうためにも、体力を温存し、万全の状態^{フレイヤ・ファミリア}で最強の派閥と激突するためにも、『精霊馬』の力を借りたのだ。

これが間違いなく、戦争遊戯^{ウォーゲーム}に参戦するためにリユールが出せる『最高速度』だ。

「ねえ、リユール。私に教えてくれた答えは、変わっていない?」

視界の遙か先、天へと伸びる『バベル』の形状が徐々に鮮明になっていく中、背後の温もりが問いかける。

剣製都市で再会した時、アストレアには全ての事情を話してある。

そして胸に抱く想いも、全て打ち明けている。

問われたリユールは一瞬、目を瞑^{つむ}った後、すぐに開いて力強く答えた。

「ええ、アストレア様。私はシルと会って、彼女の頬を張り飛ばす!」

過去の自分が聞けば、きつと驚くだろう乱暴な言葉を、吹き付ける風に乗せる。

「彼女を私達のもとに引きずり出して、彼女と話を交わして! 彼女が私達に与えてくれた『居場所』を必ず取り戻す!」

薄鈍色^{うすにびいろ}の髪の少女も、あの『豊穰の酒場』も、リユールにとって大切なものだ。

アリーゼ達、かつての【アストレア・ファミリア】と同じくらい、いや比べられないくらい、かけがえのない『居場所』だ。アーニヤも、クロエも、ルノアも、きつとそう思ってる。

あそこが今のリユール達の『家』なのだ。

だからリユーは取り戻しに行く。
確かめにいく。

横暴な『魔女』を気取る少女のもとへ。

彼女の『本当』を知るために。

「そう……」

すぐ後ろにいるアストレアが微笑んだのが、気配でわかった。

彼女は愛おしむように、そつと手の平をリユーの背中に添えた。

「リユー、この戦いを終えた後、巣立ちなさい。私のもとから」

「!!」

「貴方はもう、新しい居場所を見つけている。だから、貴方が望む場所へと羽ばたきなさい。貴方が今、心の中で想い浮かべる場所で——『正義の答え』を見つけた光のもとで」

『豊穡の酒場』ともう一つ、リユーが今、心の中で想い浮かべた場所。

それは白髪少年達の背中。

自分が何度も助け、何度もともに戦い、そして『希望』という『正義の答え』に導いてくれた、白い鐘の音が鳴り響く眷族達の物語。

正義は巡る。

物語も巡る。

七年前の戦いで知己が、灰の髪の魔女が導いた先の答えが『今』だとするのなら、巡りゆく希望と物語を見届けたい。そして寄り添いたいと、リユーは心のどこかで、きつと、そう思っていた。

「たとえ私との契約が途切れたとしても……星明りはずっと貴方を見守っている」

今も背に刻まれている正義の『恩恵』が温もりを宿す。

たとえ新天地に移ったとしても、彼女との絆は消えない。

アストレアの神血はリユーの背に残り続ける。女神の言葉に嘘はない。

——逃がしちゃダメよ！

脳裏に響くのは赤い髪の少女の声。

己の背に彼女達の正義を『継承』し、ずっと彼女達とともに在り続けるリユーは、笑みを浮かべていた。

「——はい!!」

響き渡る妖精の決意に呼応するように、風が吹き、草花の欠片が舞った。

走り抜けるは迷宮都市東部、大草原。

アストレア達の肉眼でも巨大市壁の輪郭を視認できるようになる中、『彼女』は上空から現れた。

「リオン！」

「アンドロメダ！ すみません、遅れました！」

飛翔靴の翼を広げ、オラリオから高速でやって来たアスフィが芸術的な滑空技術を経て、リユー達の前に舞い降りる。その手には宝玉輝く番の羽根。自分の『合図』を受け取って来てくれた友に、リユーは謝罪の言葉の裏に感謝を滲ませた。

「話はあとで！ 戦争遊戯の勝敗がこのままでは決まってしまう!! リオン、先に貴方だけ『オルザ

の都市遺跡』へ送り届けます！ アストレア様達は……！」

「大丈夫よ、アスファイ。私達もこのまま『ベオル山地』を目指します。貴方は早くリユーを」
「すみません！」

ヘルメスの文で既に戦争遊戯の舞台を知りえているアストレアが頷きを返す。
かねてから予定されていた『飛翔靴による送迎』。

きつとリユーの戦争遊戯の参戦は土壇場になると踏んでいたアスファイ達は、まずはリユーを戦場に送り届け、次にアストレア達を導いて運ぶことを計画していたのだ。

「飛ばします！ 振り落とされないでください！」

アスファイは左手を伸ばし、リユーもまた右手で掴む。

瞬く間に空高く舞い上がったアスファイとリユーは、北西に広がる『ベオル山地』へと飛び立った。

「頑張ってください、先輩！」

「負けないでー！」

既に眼下となった草原の海から、後輩達の声が鳴り響く。

今日まで自分と何度も衝突し、最後には力に貸してくれた少女達にも感謝しながら、リユーは万能者とともに蒼穹を駆け抜けた。

やがて見えてくる。

峻厳な山々が。

緑玉明色の巨大窪地湖が。

多くの者が既に倒れ、それでも希望を捨てず戦い抜く、冒険者達の戦場が。

「落とします！ —— 勝ってください、戦友!!」

手と手が放れ、全身を包み込む一瞬の浮遊感。

戦友の激励に応えるのは、腰から抜き放たれる星屑の剣の抜剣音。

落ちる。

風を切り裂いて。

落ちる。

予言者の少女が見上げては瞠目する時の狭間で。

降り立つ先は、一人の黒妖精が立つ再戦の『決闘場』。

疾風が吹く——。

【購入特典】
『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか18』
購入特典 大森藤ノ 書き下ろしショートストーリー

2023年1月21日 発行

著者	大森藤ノ
イラスト	ヤスダスズヒト
制作	株式会社ブックウォーカー 〒102-0076 東京都千代田区五番町3-1 五番町グランドビル3F
プロデュース	SBクリエイティブ株式会社 GA文庫編集部

© Fujino Omori / SB Creative Corp.
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

GA文庫	https://ga.sbcr.jp/
BOOK☆WALKER	https://bookwalker.jp/